

〈原著論文〉

Johan Huizingaの近代文明批評に関する一検証 —オランダにおける二大都市の近代建築に焦点をあてて—

杉浦 恭* 石川宏之**

**A Verification of Johan Huizinga's Criticism of Modern Civilization
~Focussing on the Modern Architecture of Two Big Cities in the Netherlands~**

Takashi SUGIURA*, Hiroyuki ISHIKAWA**

Abstract

This paper aims at verifying Johan Huizinga's criticism of modern civilization from the point of view of the modernization of architecture and the development of urban areas in the Netherlands. Representative of Huizinga's criticism of modern civilization is his consistent objection to the standardization of culture. We will clarify here in what concrete shape the standardization of culture manifested itself in Dutch modern architecture and urban areas.

On the basis of Huizinga's criticism, we examined the modern architecture of two big cities in the Netherlands, Amsterdam and Rotterdam, from the 19th century until the middle of the 20th century. As a result we found that in the outskirts of Amsterdam buildings for collective housing were constructed in which pre-fab style exterior walls and concrete and the like were used. Furthermore, that in Rotterdam standardized architecture constituted even the main stream of architecture in that period. In both cities emphasis was put on economy and in order to construct efficiently the esthetic decorative element in architecture was eliminated. With regard to the collective housing projects, the standardization of architectural design was originally prompted by the desire to improve the miserable living conditions of the masses of labourers who worked in the urban areas. This required mass-construction which was made possible by standardization. However, as a result the cultural and spiritual elements in architecture as Huizinga imagined these, that is to say architecture rich in esthetic decoration and variation, became largely forgotten in the field of architecture.

key Words : Huizinga, criticism of modern civilization, the Netherlands, modern architecture

* 愛知教育大学 Aichi University of Education
** 横浜国立大学大学院博士課程 Graduate School Yokohama National University

本稿は、ヨハン・ホイジンガの近代文明批評を、オランダにおける建築の近代化と新興都市という観点から検証することを目的としている。ここで明らかにすることは、ホイジンガが近代文明批評のなかで一貫して主張している文化の画一化に対する批判が、オランダの近代建築と都市部において、どのような形で現れていたかである。

ホイジンガの批判にもとづいて、19世紀以降、20世紀半ばまでのオランダにおける二大都市の近代建築について調べた結果、アムステルダム郊外においては、プレファブ方式の外壁やコンクリートを基調とした集合住宅が建設されていた。さらに、ロッテルダムではホイジンガが批判した規格化された建築が時代の主流となっていた。これらは、いずれも経済性に重みを置き、効率的に建設するために、建築における美的装飾の要素は省かれたのである。その集合住宅に関しては、建築設計の規格化が、もともと都市部で働く労働者の劣悪な住環境を改善することから始まった。これは、規格化によって可能となった大量生産を必要とした。しかしながら、結果としては、ホイジンガがイメージしていた建築における文化的・精神的要素、すなわち、美的装飾と多様性に満ちた建築が忘れ去られたのであった。

キーワード：ホイジンガ、近代文明批評、オランダ、近代建築

はじめに

本稿は、ホイジンガ (Johan Huizinga 1872-1945) の近代文明批評を、建築の近代化という観点から検証することを目的としている。このテーマに関する筆者の興味は、ホイジンガの近代文明批評のなかで一貫している、文化の画一化と機能優先の社会に対する批判が、オランダの近代建築と、都市における集合住宅において、どのように具現化されていたかにある。むしろ、ホイジンガ自身、近代の建築と都市について幾つかの記述を残している。果たして、それがどのような形で存在していたのか、19世紀以降のオランダについて明らかにしてみることにした。¹⁾

1. 近代建築に対するホイジンガの認識

ホイジンガは近代建築と都市の近代化にたいして、

どのような認識をもっていたのだろうか。近代文明について多くの記述をしているホイジンガは、都市の近代化についても幾つかのコメントを残している。しかしながら、前述したように、ホイジンガは近代社会の特質の一つを、「機能の優先」にみていることを忘れてはならない。新しい建築様式に象徴される都市の近代化も、この観点から言及していると考えられる。そのため、本論を進めるにあたり、二つの手順を踏むことにした。

まず始めに、ホイジンガの近代社会認識と近代文明批評の整理である。ホイジンガは、前提として、近代建築、都市の近代化を、この観点から批評していると考えられるからである。つまり、近代文明に対するホイジンガの立場を鮮明にしておく必要がある。そのうえで、第二に、近代建築と都市の近代化に対するホイジンガの具体的な記述を読みとり、ホイジンガの認識をまとめることにする。

紙幅の都合上、近代社会と近代文明に関するホイジンガの認識を、本稿の主題に関わらせて、要点のみ整理しておくことにする。²⁾

ホイジンガは、近代、特に19世紀以降のヨーロッパ社会を、経済的価値の追求に重きを置いた物質主義の社会と見ている。そこで支配的となるのは機能優先の発想である。これを下から支えているのが、効率と合理性³⁾であり、近代産業社会はこの二つの上に成り立っているとホイジンガは考えた。(Huizinga 1935, 1938, 1945)

しかし、豊かな文化の創造という観点からすれば、これはネガティブな方向に作用するとホイジンガは話を展開する。文化が多様性を失う危険をはらんでいるからである。⁴⁾ 効率を追求するあまり、ゆとりとか遊びといった余地が残されなくなることは、文化の低迷につながるるとホイジンガは考えたのである。そして近代文明が生み出した多くの産物を、ホイジンガは、均質化した、おおよそ文化というには縁遠いものであると認識した。

ホイジンガは、このような近代社会と近代文明の傾向が、少なからず建築物にも影響を及ぼすと考えたのである。

手順の二つ目として、近代建築に関するホイジンガの記述に目を向け、彼の認識をある程度絞り込んでみることにする。ホイジンガ自身、特に近代建築をテー

マとして論文や評論に著したものはないが、遺著ともいべき『Geschonden wereld (汚された世界)』のなかで、言及している箇所が幾つかある。

「我々の心を苦痛でいっぱいにする文化の喪失に、さらなる痛みを加える事柄がある。風景の破壊である。ただ、これは人間の愚かさが、直接現れるわけではない。以前は、どの場所においても、人々の住むまわりに存在していた、人間の手が加わっていない自然が消失したことである。このような自然の消失は、国や地域によって、まちまちのレベルで進んでいる現象である。小さく、人口密度の高い我々の国では、国土のあらゆる地域が、醜悪な見せかけの建造物ですっかり台無しにされた。それは、無意味な戦争のためにつくられたできそこないのコンクリートと鉄骨を意味する。しかし、それを除いたとしても、幾つかの道路や運河沿いに立ち並ぶ建物や、醜い住宅街によって、ある地域が、ほんの数年の内に侵食されてしまうのである。」

(Huizinga 1945, p.107)

この記述からなにを読みとるか。断言しても差し支えないのは、それまで手つかずに存在していた身近な自然が、新たな建造物によって破壊されていったことである。しかし、これはただの自然破壊への嘆きでは済まされない。冒頭に「文化の喪失」と書かれていることから判断しても、戦争による損壊から守るためにできる限り強固に造られた住居や建築物をも、文化の喪失として見ているのである。あるいは戦争そのものために建設された建物を意味するのかもしれない。いずれにせよ、今世紀前半に造られた、鉄筋コンクリートの建築物を指していることに違いはない。「醜悪な見せかけの建造物」、「できそこない」と言ったホイジンガの建築に対する感性を測ることは難しいが、それでもおおよそ、装飾を施さない箱形の無味乾燥な建物を指して、文化の喪失と言っていることはイメージできる。⁶⁾

また、道路や運河に沿って列状式に立ち並ぶ一連の新しい建築物からは、個性を喪失した文化の画一化を感じ取ったと思われる。⁶⁾ また、コンクリートを基調とした住宅街は、ホイジンガにとって、センスの悪

い低俗なものに映ったのであろう。これらについては次節で具体的に例証することにする。

近代建築の他に、ホイジンガは都市の近代化についても言及している。自然を破壊して新しくつくられた近代的な街並みについてである。自然の喪失はもちろん嘆かわしいが、そこに新しく築かれた都市の風景は、精神性から見た文化というには、あまりにもかけ離れた存在であった。ホイジンガは、アメリカを旅行したときに見た近代都市を、全世界的な近代化の傾向を代表する風景として捉えていたと思われる。

「これまで長い間行われてきた、人間による（神をも恐れぬ）土地の荒廃化過程は、現在もいたるところで進行している。以前は荒野だった場所から毒キノコのように生え出る不愉快な都市が膨れ上がっていく場所においては。これはある程度まで、避けることのできない悪かもしれない。経済学的あるいは農業人口学的な根拠ある見解からすれば、通常、必ず到達する結論である。地球は、そこに住んでいる者に食物を与えなければならないし、そのために都市は、それぞれ少しばかりの土地を、さらなる開発、生産、工業のために開放しなければならない。地球全体を天然記念物として申請することはできないのである。だが、そうする間に、文化を所々において維持し、支えることが困難になる。

1926年にシカゴ大学のMarshal教授が、私と、私の同行者であるトリノから来た Luigi Einaudi教授を、ミシガン湖畔の周遊に案内してくれたときに見た巨大都市ゲーレイほど、土地の荒廃化を痛切に意識したことはない。際限なく荒涼とした醜さ、ダンテの地獄にもない恐怖の場所、確かにこの街は文化と呼んでもよいすべてを失った。」(Huizinga 1945, p.109)

ホイジンガは、経済的発展の立場から、純粋な自然を保持し続けることが、ある程度困難なことも理解している。人口増加からすれば、自然を新たに切り開いて、人類を養うために利用しなければならないからである。ただその場合、都市の拡大が、機能や経済的価値に重みを置きすぎて、文化的要素をなおざりにしてゆく現実が存在する。ホイジンガは、自らが考える文

化に照らして、ここに近代都市の問題があると考えたのである。

ホイジンガは都市部の拡がりについて、単なる自然破壊以上に文化の衰退が起きていることを主張している。団塊として存在する近代建築物、それらによって形づくられる街、有用性を目的とした建物（高層建築物、工場、集合住宅、等）で構成される近代新興都市は、真の文化形成にはなんら貢献しない、文化とはかけ離れた存在であると考えたのである。

さらにホイジンガは、荒廃した土地の再建について、建築家の果たす役割の重大性についても述べている。だが、建築は絶えず技術的基盤の進歩に依存する傾向が強いため、造られる建築物は最先端の技術が適用されることになる。この点で、これからの建築技術は、果たして芸術の要素をもつことができるのであろうかという疑問がホイジンガにはある。特に、鋼鉄とコンクリートで構成される近代建築に、芸術性の視点から懐疑的な認識をもっているのである（Huizinga 1945, p.147）。

以上から、近代文明としての建築物を眺めれば、それは経済的価値に重きをおいて機能が優先されたために、画一化あるいは均質化した空虚な建造物が並び建てられることになったということになる。そして標準化・規格化された建築には、もはや創造的要素、つまり遊びの余地がほとんど残されなくなったというのである。19世紀後半以降に建てられた建築物を文化として評価するならば、建築は崇高な精神性を失ってしまったというのがホイジンガの認識である。²⁾

近代新興都市の拡がりには、自然を次々に消失させていった。機能を優先した計画に基づいて拡大し、並び立てられる新しい建築物は、極言すれば、鉄骨とコンクリートからできた単なる箱形のモノである。これを文化の範疇に入れることはできないとホイジンガは考えたのである。

2. オランダの近代建築

2-1 19世紀のオランダ都市部における住宅事情

イギリス、フランス、ドイツは、19世紀前半すでに産業革命を達成していたが、オランダは19世紀の後半になってようやく産業革命を経験することになった。そして1860年以降、大都市とその周辺で、著しい工業化が進んだのである。農村部から都市部への移住労働

者の多くは工場労働者となり、都市部とその近郊で人口増加を引き起こした。³⁾これが劣悪な住宅事情の原因の一つとなったのである。つまり、住宅の供給が必要に追いつかない状況をつくった。特に、アムステルダムとロッテルダムの二大都市においてはその傾向が顕著に見られ、多くの労働者は劣悪な住宅環境のなかで生活していた。

「大都市へと新たに転入してきた人々にとって、住まうべき住宅は皆無に等しかった。かつては一家族によって占有されていた市民住宅は、時の移り変わりに伴いその所有形態の変化を余儀なくされ、各室ごとに一家族が住むようなひどい有様となった。地下室でさえも居住に供され、1859年にはアムステルダムでは約23,000人が地下室に住んでいた。それはもともと倉庫として用いられていたものであり、湿っぽく、薄暗くて、換気性に欠けていた。」（Grinberg訳書 1990, p.48）

また、1873年にアムステルダム市当局が地下室に居住する者の調査をした結果、4,985戸の地下室に20,644人が住み、これは市の総人口の7.5%にも及んだ（山口 1980, 21頁）。

ロッテルダムでも同様に、労働者の居住空間は劣悪であった。

新運河の建設によって、ロッテルダムと北海が結ばれると、ロッテルダムは近隣都市を巻き込んで巨大な港湾コンビナートへと発展した。そのため1870年から1880年の10年間に32,000人の労働者が必要となった。人口の増加を1860年から50年間で見ると、ロッテルダムだけで5倍に膨れ上がった。工場や港湾施設で働く労働者は、ほとんどが線路かトラムの沿線に面した地域に建つあばら屋に居住し、その家族は一部屋ないし二部屋の不衛生な環境で生活していた。（Newton 1978, pp.85-86）

これらの状況は、いずれも住宅不足によるところが大きい。私的な投機家によって労働者階級向けの新築住宅が建設されたはしたが、その多くは高額な賃貸料を必要としたため、低所得者層は入居することが出来ず、結局、前述したようなスラムで生活していた。⁴⁾

このような劣悪な住宅事情を改善すべく制定された

のが1902年の住宅法（Woningwet）であった。この法律によって住宅建設が進むとともに、質的にも住環境が改善された。水洗トイレ、上下水道、換気などに関する規定が定められたのである。そして何よりも労働者用の住宅を、資本家たちの投機から切り離したことに意味があった。しかし、他方でその後建てられてゆく住宅は、ホイジンガが批判した方向へと進むのであった。

2-2 20世紀のオランダ建築

近代オランダ建築を集合住宅の様式からとらえれば、三つに分類することができる。第一に、バルラーヘ（Hendrik Petrus Berlage 1856-1934）を中心としてアムステルダムに建てられた集合住宅。第二に、アウト（Jacobus Johannes Pieter Out 1890-1963）を代表としてロッテルダムで建てられた集合住宅。第三に、プレハブ工法で建てられた集合住宅である。三者のうち、前二者は地域性を繁榮している。三者目のプレハブ工法は、当時の技術革新による時代性を繁榮している。

(i) アムステルダムの都市デザインと集合住宅

19世紀末のアムステルダムは同心円上に拡大してゆき、多くのバラックが建ち並び、住環境はいたって不健康な状況にあった。こうしたなか、1900年3月、バルラーヘは建設局よりアムステルダム南部地区開発計画の顧問建築家としての委嘱を受けた。1900年—1907年にかけての第一次開発、1915年—1917年の第二次開発を手懸け、都市デザインの中心的役割を担った。¹⁰⁾そして幾何学的に区割りされた街は、主に二つの軸から構成された。

また、この計画は、異なる社会階層を結びつける多様なタイプの住宅、つまり、庭付き郊外住宅、メゾネットタイプ¹¹⁾、公共階段をもつフラット¹²⁾の建設を含んでいた。そして、労働者のための典型的な住宅は、田園都市¹³⁾をコンセプトにおいて周辺の街区にもつくられた。

ところでバルラーヘが行ったアムステルダム南部地区の開発計画の手法は、建築と街並みの両方において効果を発揮するために、個々の集合住宅は個性的で自由なデザインをとりながらも、レンガ仕上げの集合住宅群を連続的な街路空間に用いたことに特徴がある。また、街並みは、オーダー、モニュメンタルなレイアウトやオランダの伝統的傾向のあるピクチュアレスク

¹⁴⁾を用いて統一された。

アムステルダムにある集合住宅の例を挙げてみることにしよう。

デ・ダヘラート集合住宅（De Dageraad Woningbouw 1919-1922）は、クラメール（Pieter Lodewijk Kramer 1881-1961）やデ・クラーク（Michaer de Klerk 1884-1923）が、住宅会社デ・ダヘラートの社員用住宅としてアムステルダム南部地区に建設したものである。タク通りの集合住宅は、他の部分が三層であるのに対し、交差点に面する出隅部分を五層とした。また、レンガの外壁は、たおやかに肉付けされ、自由に波うっており、海からの隠喩が見られる。

テレーゼ・シュワルセ広場に隣接する六世帯の住宅ユニットは、一見、一戸の住宅が連続しているかのように見える（図1）。この建物は、垂直な煙突と緩やかな方形屋根の誇張に特徴がある。



図1 デ・ダヘラート集合住宅

1916年、建築家であり批評家であったフラタマ（J. Gratama）は、これらの集合住宅を建てた建築家たちを「アムステルダム派」と呼んだ¹⁵⁾。その様式は、煉瓦タイル・屋根瓦・木製の窓枠に表れ、レンガ外壁の細部形態に主観的な造形傾向を強め、生命の表出としての芸術を主張している。しかしアウトは「アムステルダム派」の建築家たちが製作に用いていた要素や特色を次のように批判したのである。

「極端に押し進められた非合理性、窓、ドア、バルコニー、出窓といったものための数多くの変化に富んだモティーフ；単に形態だけのための、大胆でかつしばしば完全に非構成的な組

立；単に色彩だけのための不適切な材料の使用；
 個性的特色が強く、かつすぐれた手工技術の細
 部表現；生き生きとはしているものの、非合理
 的でかつ単に美的な興味をしか示さない大衆思
 考。」(Out訳書 1994, 28頁)

確かにこれらの集合住宅の様式は、当時の社会的要
 求や居住者の生活様式から造形を生み出したのでは
 なく、建築の外観を注目させるために、建築家の自己
 欲求から生み出されたものである。特に細部形態は、後
 ろから外観に適合するよう取り扱われている。しかし、
 窓、ドア、煙突、屋根などの細部形態における装飾は
 職人による手工技術が多く活かされており、伝統的な
 様式にとらわれない自由で変化に富んだ表現がみられ
 る。また、アカデミックな様式とはかけ離れた幻想的
 でローマン的な表現でありながらも伝統的工芸を用い
 た。その結果、集合住宅の様式は、それぞれ個性的で
 特色が強いにも関わらず、街路の景観は各要素が調和
 され、リズムをかもし出したのである。

(ii) ロッテルダムにおける標準化された平面計画の
 集合住宅の試み

1900年ごろ、ロッテルダムの人口は年間一万人づつ
 増え続けていた。都市に移り住んだ労働者へ住宅を供
 給し、最悪な居住環境を改善することが早急な課題と
 なっていた。そのためは、集合住宅の建設費を下げ
 (低所得の労働者でも賃貸できるように)、しかも、快
 適な住環境を整えることが必要とされた。したがって
 建築における装飾は建設コストを上げるため、不適切
 であると判断されたのである。居住環境を改善するた
 めにまず優先されたのは、通風や採光と、労働者が賃
 貸料を支払えるように、建設コストを下げることであ
 った。

キーフフック集合住宅 (Kieffhook woningbouw
 1928 -1929) は、アウトにより設計された長く連な
 った二階建ての規格化されたユニット住宅である。この
 住宅は、労働者のために 約300戸が建設された(図2)。
 その標準のユニットは、約4m×10mの二階建てのテ
 ラスハウスである¹⁶⁾。特徴として、個々のエレメント
 を強調せずにユニット間の分割を和らげ、ブロックは
 一つの建物として統一されている。たとえば、上階は
 プラスター塗り¹⁷⁾で、一つの帯状に扱われ、連続窓の
 黄色い木枠は亜鉛鉄版の軒先まで続いている。そして

前庭は、黄色い煉瓦と青い鉄枠によってそれぞれ分け
 られている。またその住戸のプランは、7.5m×4.1m
 の広さで、玄関とリビングルームが一階の通り沿いに
 面しており、台所は裏庭に面している。そして半円形
 の階段を上ると二階に三つの寝室がある。



図2 キーフフック集合住宅

アウトは、形と色の純粋な組み合わせによって安価
 な材料を引き立たせ、通常のコストよりはるかに安く
 住宅が建設できることを示したのである。また、地区
 内に二つの店や公園を計画し、さらに教会をつくり、
 生活に必要な不可欠な最小限の設備や広さを提示した。

ロッテルダムで活躍した建築家アウトは、アムステ
 ルダム派の建築家によって建てられた集合住宅を、建
 築論理の基礎が欠けた、私的な自己実現欲から生まれ
 たものと考えていた。そこでアウトは、新しい素材に
 よる工法を用いて、当時の生活環境にあった集合住宅
 の実現を目指したのである。

その結果、建築技術と生活環境との調和からなる新
 しい建築様式を誕生させたのである。特に、アウトに
 とって標準化という手法は、単に工業的手法のみを意
 味するのではなく、生活あるいは人を標準化すること
 でもあった。そして、必然的にもなう反復という造
 形手法によって、画一化による人間性の否定へと通ず
 る危険性を内在しながらも、大衆の平等性というある
 種の象徴的な意味を表現する可能性を持ち得るものと
 考えていたのである。(本田 1997, 220頁)

(iii) 集合住宅における規格化された建築部材の寸法
 体系

これまでアムステルダムとロッテルダムの集合住宅
 の建築様式について見てきた。次に、鉄、板ガラス、
 鉄筋コンクリートの素材を使用して、さらに経済的効

率を高めた工法方式の集合住宅を取りあげることにする。

短期間に大量の集合住宅を供給し、しかもそこに住む工場労働者が支払い可能な賃貸料の範囲で住宅を提供するには、建築物のコストダウンを行うことが不可欠である。それにはプレハブ리케이션¹⁸⁾により建築部材を大型化し、短期間で能率よく施行するか、建築部材を大量生産して部材の単価を下げるしかない。というのは、20世紀の始めにアムステルダムだけでも約2万戸の住宅不足が問題化していたし(Groenendijk 1987, p.162)、住宅建設のラッシュによって伝統的建築材料であるレンガの価格高騰といった状況が起きており、新たな工法が求められていたからである(Grinberg訳書 1990, 171頁)。

こうしたなか、1921年から1928年にかけて、アムステルダム郊外のベトンドルプ地区(Betondorp)に900戸の集合住宅が建てられた(図3)。それは、1921年にアムステルダム市住宅局が、従来の建築方法とは異なり、かつ廉価な方法としてプレファブ方式の住宅のための設計競技を行ったことに由来する。設計競技の結果、10の採用入選者のうち8種類の異なった工法が、全てコンクリートを用いていたことから、この地域は「コンクリート村」と呼ばれることになった。組織化された工法であるシステムズビルディング¹⁹⁾は、プレファブ方式の外壁やコンクリートブロックが基本的に用いられ、建設現場で製作された。



図3 ベトンドルプ地区集合住宅

一方、ロッテルダムのベルフポルダー高層住宅(Bergpolder Flats 1932-1934)は、エレベータを備えながらも労働者が支払い可能な賃貸料の範囲で建設された。これは、短期間工事を目指しての工場生産品

の活用と合理化された設計で、規格化されたプレファブ方式を採用したため経済的に見ても採算が取れた。

9階建ての住宅には、エレベータがガラス張りの階段室に設けられていた²⁰⁾(図4)。



図4 ベルフポルダー高層住宅

近代建築運動家の中には、建築技術の発展を一方の側からのみ賛美し、美的側面については完全に無視するといった専従技術者が存在した(Out訳書 1994, 50頁)。彼らは、建築を印象主義的な情調的造形からいっさい開放し、副次的な細部の装飾を排除することによって、古典的な純粹形態の方向へと向かった。つまり彼らにとって、装飾はあってもなくてもよいものであった。

2-3 様式にみる近代建築

近代建築を様式の観点からみてみることにしたい。²¹⁾

注(5)で触れたように、近代建築はホイジンガにとって様式とは言えないものであった。19世紀以前の時代様式と比べて、調和の美、精神的高みが欠けていると主張するからである。

建築は、用と美を兼ね備えたものである。アカデミックな世界では、美の概念と装飾は相互に一致するものといった考え方が支配的で、無装飾建築が非難されてきた。19世紀に至るまで、施主としての富裕階級や王室は、個人の建築家に設計を依頼し、豪華に飾られた建築によって自分の社会的地位を誇示した。装飾は、施主の品格、富裕、階級を象徴するものであったのである。

ところが20世紀になると、集合住宅の建設需要の拡大と、それに伴う出来事として、設計者と発注する施主の性格に変化が起きた。つまり、多くの住宅において、需要者が富豪から労働者へ、供給者が個人的な建築家から公社へと変わったのである。大袈裟な言い方をすれば、大衆という新しい施主が、公的な組合に住宅設計を依頼するようになったのである。

近代建築運動家の中には、建築における装飾を副次的なものにとらえ、内面的なものの不足に対する外面的な調整と考える者もいた。しかし、実際のところ建築は、技術だけでも美学だけでもなく、また理性だけでも感情でもない。両者の調和ある統一が、建築創造の目的でなければならない。建築にとって必要不可欠な要素は、実際的な要因として目的・材料・制作方法・構造であり、精神的な要因として芸術的感情である。そして時代の建築様式は、決して最終極点ではなく、むしろ一つの極点にほかならないのである。また、同時に発展の転換点であるということもできる。²²⁾ただ、様式の要因として、装飾に対する努力の姿勢と、敬虔的な態度の反映を重要視していたホイジンガは、近代建築が様式を失ったと考えたのである。

このことに関連して、ホイジンガは次のように述べている。

「溢れかえる個々の才能とは別に、技術的基盤に絶えず依存している芸術に、なお残された復興の余地は、芸術家としての行為の再認識によって成し得るであろう。技術的基盤は、絶え間ない変化を繰り返しやすい建築学においてのみ言えることである。建築資材の完全化と改良は止まることはないであろうし、荒廃したものを再建するという建築家の任務は計り知れないだろう。建築家は、鋼鉄とコンクリートの中に、なおもって形を創造する新たな可能性があるかどうかを証明しなければならないだろう。そして、建築家は、己自身の中に、つまり一般的な建築学上の形式からくる限られた範囲内でのみ、変更が可能である [自由に創造できる余地がある] という縛りをいつも感じるだろう。ほとんど耐え難いにも関わらず、我々全てにとって熟考しなければならないのは次のことである。すなわち、ある芸術が、己の創造の畑を昔の世代によ

ってほとんど使い古されたと感じ、芸術が、これから古いものの再生と模倣以外に、若干の装飾と細かな仕事だけで満足しなければならないことである。」(Huizinga 1945, pp.146-147)

ホイジンガが最後の部分で触れているように、芸術としての建築はもはやピークを過ぎて、あとは過去の遺産の模倣や再生、あるいは表面的な装飾のみに満足しなければならないとしたら、それは不幸なことであろう。実際、19世紀に流行った中世回帰はネオゴシック様式を生み出したが、近代建築運動家は、これを単なる折衷様式のごシックリバイバルとして非難し、現実とは合わないものと認識していた。たとえ様式をもっていたとしても、その模倣や再生にのみ満足しているならば、創造力の放棄を意味し、ホイジンガが文化の基礎条件の中で挙げている、高い理想に向かった努力を怠ることになるのである。

前述した近代オランダの三つの建築運動（アムステルダム、ロッテルダム、規格化された建築部材）は、表現や建築技術の新たな可能性について、問い直し考えさせた。そして時代の流れの中で精神的な要因が変化するように、物質的な要因も絶えず変化していった。その結果、工業化の進展による手工業の衰退は、細部にみられる装飾の衰退をもたらしたのである。住宅プランの標準化は、安価で良質な住宅を大量に供給する可能性をもっていたことで、当時の社会と経済的な合理性に合致して受け入れられた。新たな機能的秩序という美的要素を都市にもたらした反面、大量生産による建築設計の標準化は、街並みの均質化やあるいは画一化といった側面ももち合わせていたのである。

3. 考察

本稿は、ホイジンガの近代文明批評で一貫している文化の画一化と機能優先の社会に対する批判が、建築の分野でどのように起きていたかを、ホイジンガが残した近代建築に関する記述と合わせながら、オランダの二大都市において調べてみた。その結果、次の点が検証できた。

ベルラーヘがアムステルダムで展開した集合住宅の開発には、個性的で自由なデザインが存在していた。デ・ダヘラート集合住宅になると、標準化の傾向が見られるようになるが、それでも建築家の創造力を表現

する余地は残されていた。建物の細部装飾には、職人による巧みな手工技術が見られ、街並みの景観には調和とリズムがあった。これはホイジンガが、著書『ホモ・ルーデンス』の第一章「文化現象としての遊びの本質と意味」の中で、人間が様々な事象の中で表現する性質のうち、もっとも崇高な特性として調和とリズムを挙げていることにも通ずる (Huizinga 1938, p. 10)。つまり遊びの余地が残されており、建てられた建築物が織りなす街並みに調和とリズムが確認できるならば、その建築は、ホイジンガにとって文化の範疇にあるわけである。であるならば、ベルラーへによってアムステルダムで展開された近代建築運動は、文化の画一化や、機能優先といった、ホイジンガの近代文明批評の核心点には当たらない。

しかし、アウトによってロッテルダムで実現した標準化された集合住宅は、ホイジンガの批判した文化の画一化が、もっとも具体的な形で現れたものであった。安価なコストで住宅を供給するために規格化されたユニット住宅は、居住性を優先し、そこに住む人と生活をも標準化しようとしたのである。このような経済的価値を優先した建築物を、ホイジンガは芸術として受け入れることができなかつた。確かにこの建築からは、オランダの古き良き時代の伝統的様式は感じられない²³⁾。まさに時代が作り出した機能と効率の産物であった。だが、このような建築が大量生産された背景には、労働者階級の住環境を少しでも改善しようとする社会的要請が、強く影響していたことを忘れてはならない。²⁴⁾

また、規格化された建築部材を使ったプレファブ方式の住宅は、簡易に建てられる反面、手工芸的な努力も芸術性も見られない。「無意味な戦争のためにつくられたできそこないのコンクリートと鉄骨」とホイジンガが言ったのは、このタイプの建物であると推察される。

さらに、文化と言うには程遠いとホイジンガが批判した、毒キノコともいうべき高層建築が、オランダの大都市に出現したことも確認できた。

これまでに、ホイジンガが主張した近代文明批評の核心について、近代オランダ建築の集合住宅に、その分野的検証を求めてきた。結果、建築の画一化は、集合住宅でいえば、建築部材の規格化、建築計画の標準化、できあがった建物と街並みの均質化に見ることができた。

近代オランダ建築に詳しい矢代が言うように、「表と裏の区別すらあやふやで、空間の特性がまったく無い、透明で均質、一元的な空間をもつ、中層の住棟が一定の方向に列状に並べられていく平行配置型の集合住宅の形式こそが、20世紀前半、第二次世界大戦にいたるまでの間に試みられた、近代にありうべき居住環境を実現させるための数々の模索の結論として、オランダの場合に限らず、近代建築運動家が導いた解答であった (Grinberg訳書、訳者まえがき)」のである。

ここで、考察の最後に以下を加えておくことにしたい。

ホイジンガは文化の基礎条件として、物質的価値と精神的価値のバランス、崇高な理想に向かった努力を主張しているが、近代オランダ建築は、物質的価値に傾向し、芸術面での気高い理想も努力も見られなくなった。他方で、19世紀以前の代表的な文化は、その時代に生きた人々が、美しく生きたいという夢と崇高な理想を、遊びの中で表現し、努力することによって創られた (Huizinga 1915)。これが時代を特徴づける文化として、騎士道文化、ルネサンス文化、バロック文化などを形成したのである。そして、そこには調和とリズムが見られ、一定の様式が存在した。豊かに成熟した文化はこうして創られるとホイジンガは考えていたのである。

この観点で近代オランダ建築を評価すれば、経済的価値あるいは機能優先の発想が強い影響力をもったために、遊び心が見られないばかりか、芸術家としての理想や努力、建築家魂が失われたと言えよう。もはやホイジンガの考える文化の高みは存在しなくなったのである。近代文明に対するホイジンガの批判的認識は、近代オランダ建築において見る限り、確かに的を得ていたと考えられる。

ホイジンガは、建築家が使用可能な空間において機能を発揮するという制限に縛られていることと、近代建築の基底には施行コストという経済的要因が大きく影響していることも知っている (Huizinga 1945, p. 147)。しかし、己の余命が幾ばくもないことを悟っていたホイジンガは、病床の窓越しに、これら箱形のコンクリート群が、大戦後の復旧で再び建てられるとしたら、それは文化の成熟にとってなんと無念でならないと感じていたのである。

おわりに

文化をホイジンガの観点でとらえ、近代オランダ建築を見たら、確かにそこには画一化と機能を優先する傾向が見られた。しかし、ホイジンガはある種、貴族主義的な視点から文化や社会を見ている。そのため社会的底辺層の生活事情の改善をあまり考慮に入っていない。そこにホイジンガの弱点、あるいは近代文明批評の限界があるとも言える。また、鉄や板ガラス、鉄筋コンクリートといった素材を用いた生産方式は、近代建築の特徴的な創造行為である。これらがもつ可能性やデザイン行為が、新たな文化創造に結びついてきたのか、あるいは結びついてゆくのかも、今後検討しなければならないだろう。

それでもホイジンガの近代文明批評は、現在でもなお新鮮味をもって感じられるのはなぜだろうか。

第二次世界大戦の終結を待たずにこの世を去ったホイジンガが、もしそれから後半世紀の間に建てられた建築物を見たとしたら何を思うであろうか。文化、特に芸術性の観点から今日の建築物を見れば、遺著『汚された世界』のなかで指摘した数々の警鐘は、今でも現実味をもって読むことができると感じざるを得ない。

注

(1) 近代建築における機能優先や画一化に関する指摘は、従来から話題にされてきたもので、改めてそれを取り上げる意味はないとする意見があるやもしれない。しかし、あえてホイジンガの指摘を近代オランダ建築の中に探そうと試みるのは、ホイジンガの文化観から見た近代文明批評の核心が、建築という文化領域において、どのような形で展開されていたのかを明らかにするためである。

(2) ホイジンガの近代文明批評については、再考の意義を含め、筆者が、既に二、三の小論をまとめている(杉浦 1994,1995,1996)。本稿はその中で、都市の近代化と関連深い内容を抽出することにした。

(3) 合理性は、論理的に首尾一貫していることであり、物事に矛盾がないように整序化されることである。産業革命以降の資本主義の発展、自然科学と技術の発達、形而上的な領域や理性の限界を認めようとする態度、これら近代合理主義が実践してきたことは、論理的な首尾一貫性のもとにあった。

(4) 効率を突き詰めれば、異質性・不確実性の除去

につながる。それは同時に同質性・確実性の向上を意味する。ここから標準化・規格化が一般化する。そのため、均質化した文明品の量産という好ましからざる状況が生じるとホイジンガは考えるのである。低コストで大量に物事を達成しようとすれば、異質・例外的な要素を排除し、同じ基準で進めることが求められるからである。

(5) ホイジンガは、文化の基礎条件として、精神的価値と物質的価値のバランス、高い理想のもとに努力を内包することを挙げている(Huizinga 1935, pp.26-29)。文化として建築物を見るならば、戦争を意識した鉄筋コンクリートの箱形建築は、この条件を満たしていないと考えたのであろう。

芸術、特に絵画に深い造詣をもっているホイジンガは、近代の絵画を、感動への没入、即興性によって仕上げる空虚なものに批判している(Huizinga 1945, p.147-148)。手仕事の地道な努力、技術の熟練が見られないというのである。さらに近年の流行として、幾何学的で機械的な絵画がもてはやされることも批判している。これは、コンクリートと鉄骨で造られた不可思議な近代建築にも共通する面があるのではないだろうか。

もう一つ特筆しておくべきは、時代様式の喪失である。ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロックといった造形表現の一定形式は、時代の思考生活を美的な領域へと高め、等質性と調和の美をつくり出した。だが、19世紀以降は、経済的価値、物質的価値が優先され、精神的価値が軽視されると、もはや様式といえるものを失った。ここにこそ文化の問題の核心があるとホイジンガはいつている。(Huizinga 1935, pp.194-198)

箱形の建物に代表される近代建築には、精神的高みも、手仕事の努力も見られない。あるのは、いかに効率よく、しかも機能的な空間をつくり出すかである。経済的価値を追求した結果、19世紀までの建築とはおよそ違った人間味のない建物が生まれたと、ホイジンガは感じたのであろう。

しかし、鉄骨とコンクリートを使った建築技術は、科学技術の進歩の成果であり、時代の要請に応えたものである。そのため戦争を抜きにしても、丈夫な建築物を建てる技術が普及することは自然な普遍化過程であり、これを文化の喪失と言い切ってしまうホイジン

ガには、極論しすぎる感も否めない。だが、ホイジンガが指摘するのは建築部材と建築技術そのものよりも、鉄骨とコンクリートを使った建築物のスタイルである。効率や機能に重点を置いて均質化した単純な箱形建築を並び建てること、ここに文化の喪失あるいは文化の衰退を感じているのである。これらを時代の様式というには、ホイジンガにとって到底無理なことであった。

(6) ホイジンガは、社会生活全般の画一化傾向が、文化に対して死をもたらすとまで言っている。多様性こそが、文化に豊かな実りをもたらすと考えている。(Huizinga 1945, p.171,194)

(7) 本来、文化とは、崇高な精神に支えられ、遊び心をもちながらも努力のもとに創造されるものであると、ホイジンガは考えた。この点で、19世紀後半以降の建築物は、スタイルや装飾面において、気高さや繊細さに欠けている。それゆえ文化としての建築物を評価すれば、以前に比べて著しくレベルが低下したと考えるのである。近代の建築物とそれが織りなす均質化した街並みは、ホイジンガの目にはどう見ても美しいとは映らなかったのである。

(8) 都市部への労働者の移住は、都市中心部と近郊地域において人口増加をもたらした。たとえば、アムステルダムとハーレムがある北ホラント州では、1850年におよそ人口50万人であったのが、1900年にはほぼ二倍に膨れ上がり、ロッテルダムとデンハーグがある南ホラント州でも1850年の時点で約600万人であったのが、50年の間に2倍に増えている(Lee 1979, p.261)。

都市に限ってみれば、1869年にアムステルダムの人口は264,694人で、ロッテルダムは116,232人であった。それが1899年にはアムステルダムが510,853人、ロッテルダムが318,507人に増加している(Wagenaar 1986, p.15,26)。

これらは都市部に進んだ工業化によるところが大きい。

(9) 新築住宅といっても通風性や換気性能の欠如、一人当たりの専有面積の狭少性など、悪質な住環境には変わりなかった。

オランダ南部の都市マーストリヒトにおいても1864年に工場労働者用住宅が建てられたが、これは後に「人間用倉庫」と陰口をたたかれるほどひどいものであった。70家族が住んでいたが、その居住地区へと通

じる入り口はただの一つであった。ここで付記しておくべきは、19世紀半ばを迎えるまで、オランダにはスラムが存在していなかったことである。(Grinberg 1990, 34頁)

(10) 第一次開発は、ウィーンの都市建築家カミロ・ジッテ(Camillo Sittele 1843-1903)の影響を受け、美学的な都市デザインであった。第二次開発は、大通りの連なりや広場、公的な建物を優先としたモニュメントを強調し、緑地帯や植栽、通りの整備も行われた。

(11) 共同住宅の住戸形式の一つで「複層住戸」ともいう。各住戸が二層以上で構成されているもので、各住戸の玄関にアクセスする廊下は一階または二階おきに通る。

(12) 各住戸が一層で完結している集合住宅形式。

(13) 田園的環境を広範囲に保った都市のこと。大都市に工業の集積、人口の集中が進み、都市問題が顕在化した19世紀末に西欧で出現した都市計画概念である。都市生活と田園生活を共に享受できるよう、土地の私的所有の制限や都市の変化の計画制御、都市規模の限定などの主張をもっていた。

(14) 18世紀の後半にイギリスで興って、19世紀中頃までヨーロッパで流行した様式である。田園・民族・異国趣味・非対称などの美を尊重するもので、ベランダをもち、木骨構造をとる場合が多い。主として中産階級の住宅や別荘などに用いられた。

(15) 「アムステルダム派」という名の起源は確定できないが、1916年、フラタマがベルラーへ誕生60年記念論文集で「もっとも新しい傾向の建築家は、表現主義的で現代のロマンティズムと幻想に満ちたアムステルダム派の建築家たちである」と述べたのを初見とした。

(16) 各住居が区画された専用の庭をもつ連続的な住宅である。その多くが二階建てで、各戸が境壁を共有しながら地面と接している。

(17) 鉱物質の粉末と水とを混練して塗り仕上げたもの。漆喰塗り。

(18) 現場での施行の前にはあらかじめ組み立てておくこと、すなわち現場での作業を別の場所に移して行うこと。具体的には、工場での部材の加工、組立を行い、現場で所定の場所に取り付けること。生産性の向上、質の均質性、精度の向上などをねらった建築生産における技術革新の手段の一つである。

(19) 建物を、構造体、外周壁、天井などの幾つかの部分に分け、それぞれに性能仕様を設定し、工業製品として生産する建設手法。生産効率の向上が求められる場合に適用される。

(20) 住戸は、幅6m×奥行8mで、玄関側に台所・風呂・トイレ・子ども部屋があり、バルコニー側にリビングルームや寝室がある。日差しも入り、明るい間取りであった。階段やバルコニーの床はブレファブ方式で造られたコンクリートで、火災対策として、コンクリート製の床が木製と交互に二階ごとに使われている。一階には倉庫や洗濯兼乾燥室がある。

高層住宅はハーグ、アムステルダムにも見られた。ハーグに建てられたニルヴァーナ集合住宅(1927-1929)は鉄筋コンクリート骨組構造で、オランダ初の高層住宅であった。アムステルダムでは1930年に12層のヴォルケンクラバー高層住宅が建てられた。しかし、高層住宅は周囲との不調和感やモニュメンタルな性格をもっていたため、一般に積極的な評価を得ることはなかった。

(21) 様式概念について整理しておけば、様式とは、ある時代や地域特有の共通の性質を意味し、またその美の理念も指す。そして建築様式は、各時代、地域の形態的特徴を区別するために用いられる。たとえば、12世紀の中頃、北フランスで発達したゴシック様式や、15世紀初期、イタリアのフィレンツェで形成され広まったルネッサンス様式がそうである。

(22) 様式の変遷は、細部形態における装飾的価値観の変化でもある。ただし各様式は、それぞれ独自の価値観をもつので、様式相互間には原則として優劣はない。つまり建築様式は、その時代、地域の社会的価値観により生まれてくるものである。(井上 1991, 203頁)

(23) オランダの伝統的建築様式の一例として、切妻を挙げることができる。切妻はすでに中世から存在していたが、オランダルネサンス期に発達した鋸形の段状切妻は美しい。また、1630年ごろから現れた顎型切妻は、二世紀に渡って続いた。特に、1660年以降の釣り鐘型切妻は、豊かな装飾が施されている。

(24) 社会生活を営む人々全体の住環境の平均値を上げることが理想とされたのである。この時代にあって、社会的背景から考えれば、ホイジンガの意図する文化の創造には無理があるのかもしれない。そして、コン

クリートや鉄骨を使った建築物が多くなったのは、前述したように、20世紀に入ってからレンガの価格が高騰したことも影響している。

引用・参考文献

- 青木繁・他編 1993,『建築大事典』彰国社。
- Grinberg, Donald I 1982, 矢代真己訳『オランダの都市と集住』住まいの図書館出版局 1990。
- Groenendijk, Paul・Vollaard, Piet 1987, *Guide to modern architecture in the Netherlands*, Uitgeverij 010 Publishers.
- 堀口捨己 1926,『現代オランダ建築』岩波書店。
- 本田昌昭 1997,「J.J.P.アウトの建築思想における(標準化)の意味について」『日本建築学会計画系論文集』第499号 日本建築学会。
- Huizinga, Johan 1915, "Over historische levensidealen", *Verzamelde WerkenIV*, Tjeenk willnk, Haarlem, 1949.
- 1935, *In de schaduwen van morgen*, Tjeenk willnk, Haarlem.
- 1938, *Homo ludens*, Tjeenk willnk, Haarlem, 1940.
- 1945, *Geschonden wereld*, Tjeenk willnk, Haarlem.
- 井上充夫 1991,『建築美論の歩み』鹿島出版会。
- Lee, W.R. 1979, *European Demography and Economic Growth*, Croom Helen London.
- Newton, Gerald 1978, *The Netherlands an historical and cultural survey 1795-1977*, Ernest Benn Boulder Westview Press London.
- Out, J.J.P 1926, 貞包博幸訳『オランダの建築』バウハウス叢書10 中央公論美術出版 1994。
- 佐々波秀彦・尾上久雄編 1966,『オランダ総合開発計画』鹿島研究所出版会。
- 杉浦恭 1994,「余暇文化研究の新しい視点と課題 —日本におけるヨハン・ホイジンガ研究の検討をふまえて—」『教育学研究集録』第18集 筑波大学大学院博士課程教育学研究科。
- 1995,「近代社会批判家としてのJohan Huizingaについて」『日蘭学会会誌』第19巻第2号 日蘭学会。
- 杉浦恭・Denise LUTZ 1996,「Johan Huizingaの近代文明批評に関する考察 —そのルーツを20世紀

初頭のアメリカに求めてー』『日蘭学会会誌』第21巻
第1号 日蘭学会。

- 竹内啓 1980, 『近代合理主義の光と影』新曜社。
- 内田祥哉 1993, 『建築の生産とシステム』住まい学
体系051 住まいの図書館出版局。
- Wagenaar, M en Gastelaars, R.v.E 1986, “Het
ontstaan van de randstad 1815-1930” , *Geografisch
tijdschrift* X, KNAG Amsterdam 1986.
- 八木幸二・矢代真己編 1993, 「オランダの集合住宅」
『PROCESS:Architecture』プロセスアーキテクチュ
ア。
- 山口 廣 1980, 「アムステルダム建築史」『スペース
デザイン』185号 鹿島出版会。